

『ドクターヘリ 救命飛行』 (Ken Wishaw 著, 田中芳文 訳)



- B6判, 448頁
- 定価 2,730円
- 医歯薬出版

この本の題名をみて推察する内容は、血湧き肉躍る成功事例の紹介を目的にしたノンフィクションであろう。もちろん実際にヘリコプターに乗り込んだ救急医療や、病院間搬送を経験した者しか描けない英雄的な事例もふんだんに含まれている。鮫のいる海に飛び込み、遭難船に乗り込んで治療を行った事例、迫りくる山火事の現場で、自分自身に迫る危険と患者の安全をとっさに秤にかけての判断、搬送中の機内で発生した危機的状況や溺水で心肺停止状態であった少女に適切に対応し救命できた事例など、ドクターヘリの医師でなければ経験し対応できなかった状況の描写は一読の価値がある。

しかしこの本の真の価値は、著者が医療先進国のオーストラリアでもまだ十分に医療飛行の役割と価値が認知されていない段階から、ひとりの若い医師としてドクターヘリの揺籃期にかかわり、現場からあふれ出る意欲や情熱とは裏腹に、ときには敵意さえもみせる一般社会や行政の誤解や無知と格闘し、なおかつ自分自身がひとりの医師として麻酔科の専門医として成長し、そしてさらにひとりの人間として家族とかかわっていく過程の描写にあると思う。

著者はけっして英雄的にグループを牽引した人間ではなく、現場で患者の命を救う一医師として行動するなかで、燃え尽き、落ち込み、そして回

生していくという、身近な人間のドラマである。どのような医師にでもあてはまりそうな話であり、著者がこの種の話では主役となる、颯爽とした救急専門医や神の手をもった外科医というより、舞台裏で忍耐強く重症患者を支える役割が主である麻酔科医であることは、同業の書評者としては非常に納得できる。

本書では著者が麻酔科専門医となる研修の過程で、現在の日本と同じく“医療崩壊”が叫ばれていたイギリスに一時期留学したときの経験が語られている。みかけや言葉、文化や医療レベルの障壁がないように思える両国ではあるが、医療制度の違いがいかに大きな問題をもたらしていたかの記述は興味深い。

パイロットになり大空を飛びたいという夢もち続けた少年が医師になり、オーストラリアで最初の医療ヘリコプター専従の医師になったのは偶然のめぐり合わせであった。そして眼科医になろうという考えをもっていた著者が、専門の医師になる複雑な仕組みのなかで、医療ヘリコプターとの関係を通じて、結局は麻酔科医になり、さらにその後の医療ヘリコプターシステムの発展に寄与していく。

日本とは違い、オーストラリアでは基本的にボランティア組織として発達してきたドクターヘリであるが、広大な土地を網羅する意味で、固定翼飛行と合わせて現在では行政の強い支援を受け発展し、機能しているとのことである。日本ではこれから必要とされる救急、重症患者を取り扱う医療施設の集約化、重点化のなかで、ドクターヘリ整備の必要性がおおいに認識されてきているが、いまだ十分とはいえない。目の前の患者への対応に目が奪われる日常のなかで、こうした方法でドクターヘリの啓発につなげようと考えた著者の目論みは成功している。訳者が書いているとおり本書の翻訳が日本でのドクターヘリの健全な発展につながってほしいと思わせる内容である。

医療ノンフィクションの翻訳を多数手がけている訳者だけに、専門用語の選択も適切で、非常に読みやすい。医療従事者だけでなく、一般の方々にも一読をお勧めしたい。

(長野県立こども病院, 宮坂勝之/みやさかかつゆき)